氏名：田中　卓也（児童教育専攻／教授）

１．教育の責任（何をやっているか）

【担当科目と指導内容について】

児童教育専攻に所属し、主に保育士資格、幼稚園教諭免許状（第一種）取得に必要となる科目を担当している。具体的には、保育内容の５領域に関する基礎的理解に関する科目の「幼児と人間関係」、「幼児と言葉」、「保育内容総論」、また基礎的な理解を習得後に応用的な形式で学ぶ「保育内容（人間関係）指導法」、「保育内容（言葉）指導法」を担当している。また実習指導を含めた「保育実習Ⅰ（保育所）事前・事後指導」、「保育実習Ⅱ（保育所）事前・事後指導」および「保育実習Ⅰ（保育所)」、「保育実習Ⅱ（保育所)」を担当している。また、学生指導および専門的知識の習得の基盤としてゼミとして３年次より「教育学研究法Ⅰ」・「教育学研究法Ⅱ」さらには４年次より「卒業研究」を受け持ち、卒業論文指導や進路指導を行っている。ゼミ活動の基本に「子どもの遊び・文化＆保育教職総合実践」をスローガンに置き、遊び実践・子ども文化に関する専門的知識の習得を中心に置いている。加えてこれまでのゼミ活動の一環として、埼玉県滑川町にある私立保育所での園児との交流活動（里山体験活動）を実施し、実習前にゼミ学生にさまざまな経験を培う機会を設定し、千葉県野田市の私立幼稚園・幼保連携型認定こども園において、「遊びを通しての幼児との交流活動」を実施し、多くの幼稚園児らとの交流を通じて保育実践の習得に励むことになった。これらの経験について「ゼミ活動で社会貢献！」をテーマに「令和５年度高崎市内私立大学事例連携研究発表会」（新島学園短期大学）において、プレゼンテーションとしての活動報告を行った。また翌年においては「令和６年度高崎市産学官推進事業研究助成費」に採択されたことにより、群馬県内における里山自然体験活動に関する保育学生および幼児・児童との交流活動に関する考察―『ぐんまと自然と私―遊×食×音を広めよう』プロジェクトの取り組みを中心に―」と題し、2024（令和６）年７月１日～2025 年３月 31 日の期間において実施した。この企画には高崎商科大学短期大学部英語ゼミ担当教員およびゼミ学生、ぐんま里山学校代表と幼児や児童および生徒、ぐんまカーボンニュートラル協会の賛同・理解を得ることになり、多くの協力支援をいただいた。昨年も前年に続き「令和６年度高崎市内私立大学事例連携研究発表会」（高崎商科大学・高崎商科大学短期大学部）において、プレゼンテーションとしての活動報告を行った。

【非常勤講師としての活動について】

非常勤講師としては、高知大学教育学部において「日本教育史」を担当している。幼稚園、小学校、中学校教員免許取得、さらには教員採用試験合格をめざす学生を対象に、おもに冬期集中講義の形式で行っている。日本工業大学（教職教育センター）において「教育原理」、(「教育制度論」）を担当し、中学校高等学校教員免許状取得、教員採用試験合格をめざ

す学生に対し、夏季集中講義の形式（オンライン・対面双方）として実施している。また聖ヶ丘保育専門学校では、保育士・幼稚園教諭・保育教諭を希望する学生を対象に「教育学」の講義を受け持っている。また 2 年課程のⅠ部の学生、3 年課程のⅡ部の学生をそれぞれ担当する。さらに、東京墨田看護専門学校では看護学科の学生を対象に将来の看護士になるべく、「レクリエーション論」を担当し、レクリエーションを通じて患者とのコミュニケーションが図ることができる看護師養成に努めている。

また東京福祉大学児童保育学部および教育学部の非常勤講師（「保育教職実践演習：幼稚園」、「保育教育課程論」）、岡崎女子短期大学幼児教育学科Ⅰ部およびⅢ部の非常勤講師（「教育方法学」）、金城学院大学人間科学部現代子ども学科の非常勤講師（「教育人間学」）をはじめ多数の経験がある。

【課外活動の指導について】

バレーボールサークル（同好会）の部長を務めている。また関東地方の各都県で実施されている子育て支援員研修・放課後子ども児童支援員研修講師（静岡県、群馬県、長野県、岐阜県など）さらに他大学における教員採用試験対策講座の講師（環太平洋大学、武蔵野大学、茨城大学、文京学院大学など）について不定期であるが実施した経験をもつ。

２．教育の理念（なぜやっているか）

【学生の主体的な成長の支援者（のひとり）として】

学生一人ひとりが大学生としてまずは主体的に学び、自己の成長を実感できるような環境づくりとそれを提供することにある。また昨今、自分自身に自信が持てない、いわゆる自己肯定感の低いと学生に対して注視しながら、彼らに自信や価値、誇りを身につけることができるように促している。将来、保育・教育現場において、子どもたちに対して適切な保育を行うことができ、学生一人ひとりの成長を最大限サポートできるよう、保育者としての意識を高めることにも力を注いでいる。

保育者を目指す学生が、「主体的に学ぶ」ためにはどのような学びの環境を準備していくとよいのかについても、日頃より自問自答し、反省（リフレクション）も欠かさない。また「教師も学生から学ぶことがある」という、これまでの自身の教師経験で培った教訓も十分のふまえながら、自らも学ぶことを忘れないでいる。

本学児童教育専攻幼児教育コースでは、ほとんどの学生が、将来子ども（乳児・幼児）と深く関わる仕事に就くことが多いために、「子どもとふれあい、子どもと関わる人を育てる」ことを念頭に置きながら普段の教育を行っている。学生と対面でコミュニケーションを図ることができる機会を設け、学生の考えや意見を熟慮し、さらに学生間の関係性を深めなが

ら、学びの意欲を向上させることにつなげる努力も惜しまない。学生自らの「気づき」・「発見」を大事にしながら、間違えを恐れず実践することができる学生が育つことになれば、相手の立場に立って考えることのできるワンランク上の保育者を育てている。

３．教育の方法（どのようにやっているか）

【学会や研究会・研修会への積極的参加】

保育をめざす学生たちに、常に最新の保育の動向や今後の展開などを伝達するために、保育に関する学会（日本保育学会、日本乳幼児教育学会、日本子ども学会、日本子ども社会学会など）や研究会（「日本保育学会中部ブロック研究会」、「幼児の英語研究会」、「令和の保育を考える研究会」など）、研修会（全国保育士養成協議会全国保育士養成セミナーおよび関東ブロック研修）などに積極的に参加し、自らも悉皆習得することを通じて、保育現場に出る学生への情報提供、協力支援を惜しまない。また保育者養成校に勤務する大学教員、短期大学教員、専門学校教員との連携協力のもと、研究助成をいただき共同研究発表（シンポジウム、自主シンポジウム、ラウンドテーブル、ポスター発表など）も行っている。

【個別指導と双方向性の重視】

保育実習やゼミでは、学生らが直面する悩みや不安、課題などに対して個別に時間を作り指導を行っている。さらに、他大学ではオンライン授業などを実施し、「双方向性」を重視すしながら、ディスカッションやバズ学習、グループ学習などを通じて学生同士の意見交換を促し、深い学びを引き出すことに努めている。

４．教育の成果（行った結果どうだったか）

【進路における成果】

これまでの教育活動を通じて、学生たちは自らの可能性や能力に気づくことが見られ、自分自身の可能性を広げていくことに挑戦していくことになった。また様々な分野でその力を発揮している姿についてもうかがい知ることができた。

保育実習を経験することを通じて、学生たちは現場での経験を通じて自己成長を遂げ、将来の目標に向けた具体的なプランを描くことができるようになっている。

【卒業研究での学びの成果】

卒業研究では、主に保育・教育分野を中心に、各自が興味を持つテーマに深く取り組み、その成果について毎年２月初旬の開催の「卒業論文発表会」で論文全体の要旨について発表を行っている。このような経験を積むことを通じて、彼らの学びの成果を実感している。

５．教育における今後の目標（これからどうするのか）

【指導方法と教育内容のさらなる向上】

今後の目標としては、学生の多様なニーズに応じた指導方法のさらなる発展と、教育内容の質的向上を目指していきたい。また学生に寄り添った指導、教育の充実を目標とし、大学教員と学生がともに成長できる機会としたい。

また昨今の AI の進展に伴い、教育のデジタル化がますます進むようになってきている。このような状況に対応可能なオンライン教材の作成・充実を図ることや、保育実習などにおける現場体験のさらなる拡充を図るために、より実践的な指導ができる環境を整備したい。

【学生の主体的な学びの支援】

大学における学びの中心・主人公は、まぎれもなく学生である。学生がつねに主体的に学び続けることができるよう、学習サポートする仕組みの構築やフィードバックの向上を図りながら、彼らがワンランク上の保育者になるべく、その基盤を提供していくことを目ざしたい。

（2025 年 6 月 1 日現在）